

平成24年11月22日(木)
第47回全道高等学校郷土研究発表大会

涌元と賀張の永樂通寶について

函館工業高等専門学校
埋蔵文化財研究会

加澤晴華(3年) 川上桐佳(3年) 杉本紬(2年)
多田佳歩(2年) 渡邊 健一朗(2年)

1 永樂通寶

このたび函館工業高等専門学校・埋蔵文化財研究会は、北海道で出土した永樂通寶の成分分析を行ったので、その結果を報告する。

2 涌元古銭・賀張古銭の概要

^{わかもと}涌元古銭は、1951年（1952年の可能性もあり）に、北海道南部の渡島半島に位置する知内町涌元地区で道路工事の際に出土した古銭である。この古銭は漆のようなものが塗られた方形の籠に入っていたというが、現在はそのような容器は残っていない。2006年に知内町在住の工藤勇治氏が、知内町郷土資料館に寄贈したものである。銭種(お金の種類)は現在わかっているだけで39種類あり、総計996枚だがもとはこの量の3倍あったといわれている。組成は唐銭から明銭で、最新銭は宣徳通寶である。

^{かぼり}賀張古銭は、1972年に北海道日高地方の日高町賀張で暗渠排水工事の際に出土した古銭であり、現在は日高町立門別図書館郷土資料館に所蔵されている。銭種は35種類あり、総数は664枚。組成は涌元古銭と同様に唐銭から明銭まで、最新銭も涌元古銭と同じく宣徳通寶である。

3 永樂通寶とは

永樂通寶とは1408年、明の第三代皇帝永樂帝の時代に鑄造された貨幣であり、涌元古銭に205枚、賀張古銭に216枚含まれている。数多くある古銭の中でも文字や輪郭がはっきりしているのが特徴で、日本では数多く流通していたが、生産国である中国ではほとんど流通していなかったことが、最近の研究で明らかになった。

4 制銭と鏹銭について

(1) 制銭と鏹銭について

制銭というのは中国で正式に鑄造された古銭であり、確かな材料、高い技術によって鮮明な文字や輪郭で鑄造された貨幣である。さらに、政府の厳格な管理のため、材料である金属の割合がほぼ定められている。鏹銭とは正式に鑄造されていない粗悪なお金であり、安価な材料、未熟な技術、不鮮明な文字や輪郭が特徴である。これらは厳格な管理のもとに鑄造された貨幣ではないため、金属の割合がきちんと決まっていない。これまでは、文字の輪郭が鮮明であるかを外観だけで判断していた。だが、この外観での判断では正確に制銭と鏹銭を判別することは不可能である。



図1 永樂通寶

(2) 永樂通寶をめぐる二つの説

現在永樂通寶については、そのほとんどが鏹銭であるという説と、そのほとんどが制銭であるという二つの説が存在する。まずほとんど鏹銭であるという説では、永樂通寶は中国ではほとんど流通しなかったことから、日本で発見された永樂通寶は鏹銭であるとする。一方ほとんど制銭だとする説では、永樂通寶の字体が揃っていることから、多少の鏹銭は

存在するが制銭を上回る量の貨幣が流通するわけがないとする。どちらも説にも根拠があり、決着がつかないという状態である。

6 仮説

埋蔵文化財研究会は、新しい古銭の判別方法を提案し、この永樂通寶の問題を解決する試みを行った。制銭は中国で作られたお金であるので、金属の割合が一定であるはずである。さらに鑿銭は厳格に材料を定めているわけでもなく、作る技術が未熟であったので、制銭とは違い、金属の割合が一定にならない。

私たちは制銭と鑿銭の金属の成分に着目し、成分分析を行うことで制銭と鑿銭を見分けることができるのではないかと考えた。永樂通寶は中国ではほとんど流通しなかった。このことから、鑿銭を製造するとなると、そのほとんどが日本で作られていたものと考えられる。さらに、日本ではスズが生産されないので、日本で作られた鑿銭はスズが少ないのではないかと考えた。一方、制銭は政府が正式に鑄造したお金なので、製法、材料が厳格に定められている。つまり制銭は金属の成分が一定であり、分析結果は全て似たような値になるのではないかと考えた。

7 結果と考察

今回の成分分析では、1枚の古銭につき4ヶ所それぞれ測定し、その平均を1枚の古銭の分析結果とした。

涌元古銭205枚、賀張古銭216枚、それぞれの分析結果を三角ダイアグラムにプロットしたものを図2に示す。

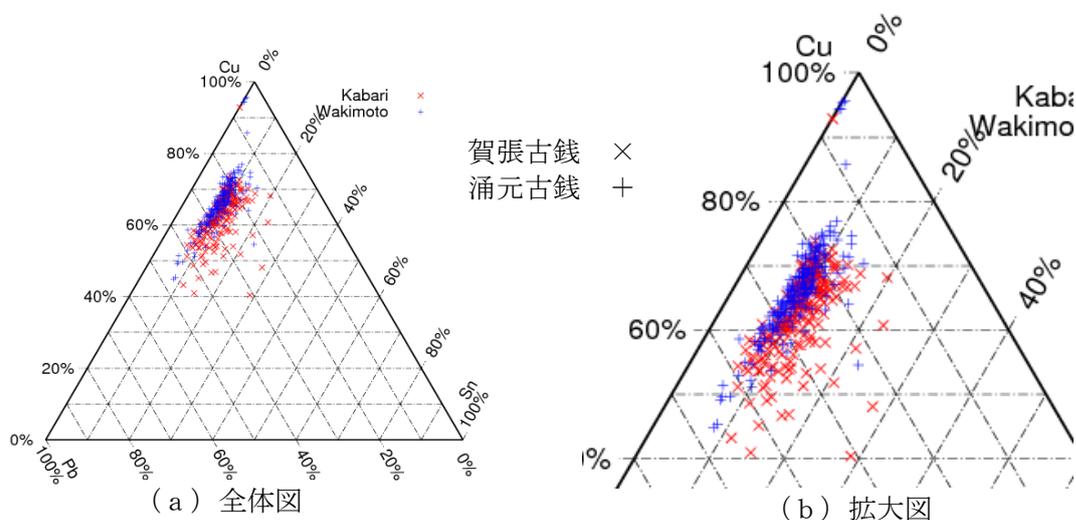


図2 銅・鉛・スズによる三角ダイアグラム

図2より、どちらの古銭も銅50～75%、鉛15～40%、スズ8～15%の部分に集中していることがわかる。さらにこのまわりでは、銅が多いもの・鉛が多いもの・スズが多いものの4つのグループに分かれている。

まず、銅50～75%で多くのプロットが集まっている部分の古銭に注目すると、型が綺麗であり文字輪郭も鮮明であった。これだけ成分が定まっているということは、中国で高い技術、厳格な管理の下でつくられた制銭であると推測できる。銅が著しく多いもの、また、鉛が多いものは、文字輪郭が不鮮明で鑿銭と判断できた。しかしスズが多いものは、こ

れまでの鑿銭と比べると型が綺麗だが、制銭というには文字や輪郭が不鮮明である。「できの良い鑿銭」か「できの悪い制銭」かは、外観では判断できない。

しかし、今回の成分分析で制銭は成分が大体一定であり、鑿銭は成分がバラつくということがわかったので、このスズが多い銭は「できの良い鑿銭」と言える。外観で判断した従来の方法では制銭か鑿銭かはっきりと見分けることができない場合でも成分分析を行うことで、鑿銭と見分けることができた。

制銭と思われるものは大体成分が同じだったことから、「制銭は、成分がほぼ決まっている」という仮説は正しいといえる。永樂通寶についての二つの説は、多くの古銭が同じような成分だったことから、「ほとんど制銭説」が正しいと考えられる。

鑿銭は銅や鉛が多いものばかりではなく、スズが多いものが存在したことから、「鑿銭はスズが少ない」という仮説は成り立たなかった。文字輪郭が綺麗なものでも、金属成分が制銭と異なるものがあることから、成分分析は制銭鑿銭の判別に有効であることがわかった。

謝辞

古銭や資料をご提供くださいました、知内町郷土資料館様、日高町立門別図書館郷土資料館様に御礼申し上げます。

エネルギー分散型蛍光X線分析装置の使用についてご指導くださいました、函館工業高等専門学校小林淳哉先生に御礼申し上げます。

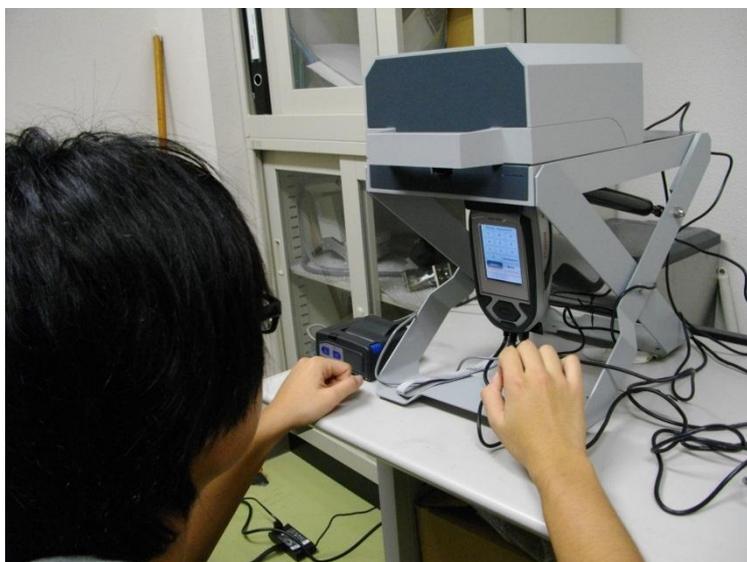


図3 エネルギー分散型蛍光X線装置